地方史研究協議会編
日本産業史大系
――関東地方編――

近年経済風土記等と称して地方の経済史関係の書物や叢書が目立つて出版されてきた折から、学者の真摯な研究機関である地方史研究協議会が故野村兼太郎以下老若合せたこの方面での専門家多数を揃えて、総論編をもふくむ地方毎の産業史大系八巻を企図し、その一部が既に出版されたことは慶賀すべきである。しかも従来の大家のみによるおきまりの記述内容とは異つて、メンバー中にも一、二の地理学者も参加していることは、便宜な付図や、地帯毎の叙述配列等に充分伺うことが出来る。例えば関東編にあつて江戸に対して江戸周辺の産物をあげ、ここに江戸近郊の蔬菜栽培から始めて行徳の塩業、銚子・野田の醤油、行田の足袋、狭山の茶、青梅の林業、川口の鋳物等を収め、ついで関東の漁業地帯や北関東の織物地帯をその外周地帯として一括さす等である。ところが同書についてさらに詳しくみてみると関東の特産物として常陸、下野の紙や常州のこんにやく、常陸及び秦野の煙草があげられ、ついで特権的保護産業中に上州の砥石や足尾銅山等をあげて、第二の周辺地域の項中からは別扱いにしている。また突然に殖産興業の項がおかれ、最後に近代産業への転換に終つている。よくみると章節がないことや、本書の構成が大体専門執筆者本位であることが気付かれるのであり、一方地方史という以上地帯論を考え、地方の産業史のしめくくりを近代資本の形成と工業地帯の発生で終らそうとするもののようである。それにしても地方史における産業立地論と地帯論を本書においていかに組合せるかの努力がやや欠けているように思われる。これは関東、近畿両編とも序説の執筆者になおかかる新しい意図の見出されないことから明かである。地理学者が地域構成の基盤に流れる歴史を常に無視しないように努力しているほどには歴史家は地域論を真剣に考えてはいないように思える。関東地方の産業を江戸という一大消費地を中心としてチューネン的な圏構造に従つて配列するとか、なお地方の概念に考うべきものが多くあるのではなかろうか。本書が学術の薫り高い叢書であるだけに、大系への期待は大きい。

（一九五九年東京大学出版会　五六〇円）

（藤岡謙二郎）

編集後記

この夏休み、宮崎理事長が国際会議に御出席のため、ソ連・北欧諸国を歴訪なさるのをはじめ、我々は研究旅行などに費やし、今後の研究計画を整備致しました。その炎暑のうちに編集した本号も、爽やかな秋風とともにお届けできることになりました。内容的にも地理学の性格づけに関する本質論や、細緻な語彙考証など多彩で、夏枯れが杞憂に終つたことを喜んでおります。また先号同封しましたアンケートについて多くの建設的御意見をいただき、感謝致しますとともに、お忘れの方は至急御送付下さるようお願い致します。今後とも、ややもすれば安易な編集方針に陥りがちな我々に、御批判をお寄せ下されば光栄に思います。御意見をどのように紙面に反映さすかを話しあつておりますが、そのためにも充実した玉稿をお待ちしております。

（山澄元）

一九六〇年八月二五日印刷
一九六〇年九月一日発行
史林（第四三巻第五号）　定価一八〇円
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
発行所　史学研究会
振替京都五一五五番
理事長　宮崎市定
編集主任　赤松俊秀
印刷所　京都市下京区西七条御所ノ内東町三九
中村印刷株式会社